

西伊豆健育会病院

症 例 概 要 Y・T:様 (80代 男性)

病名:肺水腫

入院期間:平成30年4月中旬～現在まで入院中

経過:外来透析患者が呼吸苦でタクシーで来院。透析開始直前に心肺停止となり挿管。原因は肺水腫であった。アドレナリン投与後、心拍再開。呼吸器装着し透析開始。透析終了後には会話可能となるほど回復した。

内 容

4月中旬 朝、透析患者Y氏の奥様から透析室に「胸が苦しいからタクシーで病院に行きます。」との電話が入った。スタッフが「救急車でなくても大丈夫ですか?」と確認すると、「大丈夫です。」との返事だった。車椅子を用意し病院玄関で待機していた。到着後、直ちに車椅子で透析室入室。いつもは着替えるが苦しそうなので、着替えをせずにベッドに臥床。セミファーラー位とし、シャント音確認するが確認できない。スリルもなく副院長にコール。直後に意識レベル低下。頸動脈触知不可。心肺停止状態となった。コードブルーを宣言しCPR開始。医師、病棟看護師、セラピスト、放射線技師など集結。バックバルブ換気をしながらベッドのままERへ移動し挿管。JCS:3-300。アドレナリン投与後、1分後心拍再開した。Y氏の心機能は低下しており、呼吸苦は肺水腫によるものであった。主治医から奥様へ病状説明をした。「心臓が1回止まりました。今は動いていますが、意識はない状態です。」と伝えると、奥様は「先生、どうしたらいいですか?」との質問を受けた。Y氏は日頃から、「いつ、どうなってもいい」と口にしてきたため、主治医は「いつも、ご自宅でYさんと、どんな話をしていますか?今は厳しい状態です。」と伝えると、奥様は「先生、覚悟をしろってことですね。わかりました。子供に連絡します。」と、現状を受け入れた様子であった。

30分後、意識レベル改善(E4VTM6)。1時間後ERから透析室に移動し、呼吸器装着し透析開始となった。Y氏の微妙な変化を見逃さないよう、初期研修医が透析終了までY氏に付き添うこととなった。透析開始後、2時間近くが経過した頃、「管を取れ」とのジェスチャーあり、奥様を呼びにいった。奥様からの「お帰り」との声掛けに、言葉を発することはできないが表情で答えていた。

昼過ぎに透析終了。抜管し酸素マスクとなった。透析スタッフよりY氏に「戻ってきたね。」「帰って来たね。」と声を掛けた。病棟に移動する際、ドアの外に奥様がいたので、Y氏に「まだ奥さんを一人にしてはだめですよ。」と伝えると「奥さんのことを好きですから。」と発した言葉に、思わず皆から笑みがこぼれた。これまでY氏が奥様のことに限らず、自分の気持ちを伝えたことは一度もなかった。奥様も「本当に良かった」と、とても嬉しそうだった。

Y氏が死の淵から生還できたことは、チーム医療が実践できたことに他ならない。今回、命を救えただけでなく、Y氏ご夫妻を幸せな笑顔にできた。我々の使命は命を救うだけでなく、患者と患者家族を笑顔にすることだと気付かせてくれた症例であった。